

## 研究者交流支援事業 実施報告書

文学部・専任教授 牧野淳司

研究者交流支援事業により、2024年1月21日より2024年1月26日まで、中国・山東大学学国語学院准教授である呉松梅氏を招聘して研究交流を行い、1月23日には特別講義を実施した。

特別講義は駿河台キャンパス、リバティタワー8階1083教室で、15:20～17:00の時間帯で行った。講義題目は「漢字が語る日中文化交流」であった。

呉松梅氏は、かつて学位取得のため、國學院大學と明治大学で、『源氏物語』を中心とする日本の古典文学を学ばれた。『源氏物語』については、「『源氏物語』若菜上巻における明石入道の夢について—漢籍に見られる夢解きの方法の視点から—」（『東アジア研究』第18号、2020年3月）などの論文がある。一方、日本語教育の専門家でもあり、現在、中国で日本語を学ぶ学生を指導されている。中日通訳や翻訳の方法を研究されており、訳書として『神話の心理学』（河合隼雄著、岩波書店2016年出版）の中国語訳：《神話的心理学》（生活・读书・新知三联书店2022年6月）や、『いじめ自殺—12人の親の証言』（鎌田慧著、岩波書店2007年出版）の中国語訳：《欺凌自杀》（上海译文出版社2023年6月）がある。前近代（古代）から現代に至るまで、日中の諸文化を広い視野から比較研究されていると言えよう。

そこで、特別講義では、日本の古典文学を学ぶ学生だけではなく、現代中国の言語文化や日中交流に関心を持つ学生の刺戟となるテーマでの講義を依頼した。話題の中心になったのは、漢字を用いた言葉遊びである。中国と日本が漢字を用いてどのような交流を持ってきたか、古い時代から現代に至るまでの豊富な事例を挙げて、中日文化交流の様相を探る講義となった。

講義は、来日早々目に留まった静嘉堂美術館の特別展ポスター「HAPPY 龍 YEAR 2024！」から始まり、2024年の春節聯歡晩会のロゴのもとになった「𪛗」へ繋がり、そのほかユニークな合体字が中国と日本の双方で古い時代から多数見られることへと移っていった。取り上げられた事例の数の多さに圧倒されたが、そのどれもが興味深いものであった。中国と日本の人々が、昔からいつも、遊び心いっぱい漢字に親しんできたことが具体的に理解できた。また、合体字に限らない漢字遊びも多数の事例を拾うことができることが示された。『万葉集』『和漢朗詠集』『玉台新詠』などの詩や歌のほか、『三国志』『北齊書』『朝野僉載』など史書や随筆集、『太平広記』『源氏物語』などの説話や物語など、あらゆるところに漢字を用いた「あそび」や「謎解き」は出てくるのであった。新しい漢字が、翻訳とともに生み出される事例も紹介された。古い時代では仏典の漢訳が重要だが、「仏」という漢字

が現代の中国では「仏系」など、思ってもみなかった意味で使用されていることも知った。かつてアジアに広がった漢字文化圏であるが、今は漢字が廃止されている地域も多い。その中で、日本と中国は、字体の違いはあるが、漢字という文字が持つ力と重みが、諸文化を作り上げる重要な土台となっている。そういった状況を考えさせられる講義となった。

特別講義の参加者は18名であった。文学部日本文学専攻の学生と、大学院文学研究科日本文学専攻の院生が中心であった。補講期間に授業とは無関係に実施した講義であったが、日中の古典文学を学ぶ学生・院生のほか、日中の言語と文化交流に関心を持つ学生が参加した。講義は60分程度でお願いし、残りの40分程度は討論と情報交換に当てた。参加者には単に聴講するだけではなく、積極的に質問・意見を出してくれるよう、あらかじめお願いして講義を開始した。質疑応答は堅苦しい雰囲気ではなく、笑いを交えながら意見交換が行われた。それぞれの関心から発言してもらったので、話題はさまざまに移っていったが、日本古典文学を研究する院生は、漢字・漢字遊びという視点から「文学」を見直すことができることを学び、日中の言語・文化に興味を持つ学生は、国際的視座から物事を考えることの面白さを感じ取ってくれたと確信している。

招聘期間中、特別講義の他に、今後の研究打合せと関連施設見学を行った。呉松梅氏からは、中国の国家プロジェクト「世界漢籍合璧」(漢籍の調査や目録作り及び珍本の複製作業)の状況と、日本での調査・研究での協力関係について、相談を受けた。こちらからは、2023年度から開始した明治大学図書館所蔵の毛利家文庫旧蔵書の調査・整理の状況を報告し、特に漢籍調査について協力関係を構築することで合意した。ちょうど図書館ギャラリーでは毛利家文庫旧蔵書の展示が開催中であったので、これをご覧いただきながら、概要を説明することもできた。また、日中の文化交流に関係する展示(鎌倉歴史交流館「文永の役750年 異国襲来一東アジアと鎌倉の中世一」)の見学を実施して、今後の研究交流について意見交換、情報交換を行った。